The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	食道癌
Author(s)	小林, 久
Citation	癌と人. 1977, 5, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24162
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

食　道　癌

小　林　　久*

—食道癌とは？—

食道癌は胃癌や乳癌程一般的には広く知れ渡っていませんが，どなたも一度は耳にされたことのある病名だと思います。口腔から胃までの，食物の通る細長い管腔を食道と呼びますが，食道癌とはその管腔より発生した癌のことを云います。食道癌の発生頻度は，他の癌に比べますとそう高くはありません。最も多いとされる胃癌の約10%にしか過ぎません。しかしながら，男では胃癌，肺癌，肝癌に次いで多く，女の3倍に相当しています。

—食道癌の原因は？—

残念ながら真の原因は他の癌と同様に不明ですが，欧米に少なく，日本，中国，ソビエト，南アフリカの一部に食道癌の頻度の高いことから，ある種の環境的因子や食事因子が重要視されています。現段階では，固い食物，熱い湯，強い酒などの食道粘膜に対する刺激が，食道癌の発生と何らかの関係があるのではないかと臆測されているに過ぎません。

—食道癌はなぜ恐しい？—

食道癌は他の癌と比べますと，極めて予後の悪いものとされ，年間約5000人もの人達がこの病気で亡くなっています。なぜ，このように食道癌は恐しい病気なのでしょうか。それは，他の癌患者の場合と比べて，次の2つの異なる点があるからです。第1の点は，早期の内に発見されるのが稀で，殆んどの場合が進行癌として診断され，手術されているからです。第2の点は，高令者に多く，特に60～70才代に最も多く，しかも開胸，開腹という大きな侵襲を必要とする手術に耐えなければならないという2重の悪条件を背負っているからです。この2つの点が食道癌の手術成績を非常に悪くしているからなのです。

—重要な自覚症状とは—

あるデータによりますと，全く自覚症状のない場合もありますが，そんな例はむしろ稀で（約7%），“早期食道癌”（癌侵潤が粘膜下層までにとどまっており，転移のないもの）であっても，殆んどのケースに何らかの訴えがあったと報告されています。食物を飲み込んだ時のつかえた感じ，異常な感じ，或いは前胸部にしみるような痛みを感じた時には要注意です。癌が進行し，食道の狭窄がひどくなりますと，食物のつかえた感じが一層明らかになり，水や汁物は飲み込めても，固形物が通らなくなります。更に進んだ状態になりますと，摂食不能がおこったり，気管内に食物が逆流して，むせたりしてきます。このような自覚症状のある時には，必ず専門の医師を訪れ，精密検査を受けるようにしましょう。

—食道癌の診断は進歩している—

元来，食道は口径の小さな細長い管腔より成り立っており，しかも心臓，大血管，気管等による外からの影響も受けており，食道病変の診断は非常に難しいものとされてきましたが，近年，食道癌の診断の進歩はめざましく，早期食道癌が相次いで報告されるようになりました。診断方法には，(1)X線診断，(2)内視鏡診断，(3)細胞診，(4)その他として，アイソトープによる診断法や奇静脈・胸管を造影して間接的に所見を得る方法などがあります。食道癌の中には，胃透視の際に偶然発見されるものもありますが，食道透視の専門家は粘調性のバリウムを使用し

* 医員（大阪大学微生物病研究所附属病院外科）

たり，或いはビデオテープを併用したりして，少しでも微細な病変を捉えようと工夫をこらしています。内視鏡診断の面でも進歩しました。食道専用の内視鏡も生まれ，食道病変をまともに捉えることが出来るようになりました。又，メチレンブルーという色素を散布することによって，今までわからなかった食道癌の病変も新たに指摘されるようになりました。細胞診による診断方法とは，癌細胞を直接顕微鏡下に認めることにより診断する方法ですが，最近，カプセル法擦過細胞診といって，かなりの実績をあげているものも報告されています。これは，ひも付カプセルを飲ませ，カプセルが胃内で溶けると，中にあったスポンジが拡大して球になるもので，これを引き出すことにより細胞診が可能になるというアイディアに富んだものです。このような検査方法を組み合わせることにより，根治手術の可能な早期食道癌が発見されるようになってきたのです。

―食道癌の治療と予後の向上―

食道癌の治療方法に於いては，第1に外科的手術療法が取られ，その補助的療法として，放射線療法，化学療法，免疫療法などが行われ，治療成績の向上が図られています。近年，食道癌の予後は非常に向上しました。それは，第1の点として，食道癌が早期の内に発見され，手術されるようになったことが上げられます。早期食道癌の5年生存率は約60%で，進行癌に比べると極めて良好な成績と云えます。第2の点として，術前，術後の管理の向上，麻酔及び手術の発達に伴なって，かなり安全に手術が行われるようになったことが上げられます。今日では，栄養状態の悪い患者でも，チューブを介して小腸に流動物を与えたり，直接大静脈内に高カロリーの輸液を投与することによって，栄養状態を改善することが可能となりました。手術の面でも，開胸，開腹が同時に，しかも安全に行われるようになり，食道の代用として胃，小腸，大腸が使われています。

―食道癌に打ち勝つには―

以上述べましたように，食道癌に対する診断と治療は日進月歩の状態です。食道癌は恐しい病気だと云って，あきらめたり，後込みしたりしないで，積極的に専門医の門をたたかれることをお勧めします。尚，食事のおいしくいただける人は，余分な心配をなさいませぬようにお願いします。食道癌の発生頻度は他の癌に比べると低いからです。